

北海道日高地方新洞探查遠征

The Caving Journal, No. 49: p. 12-14, December 2013

CJ 編集部・立命館大学探検部

立命館大学探検部ではこの夏、北海道日高地方で新洞探查遠征を行った。5月に下見を行い、遠征は8月5～9日と9月2～17日の計2回行われた。参加人数は前者が11人、後者が21人。「そもそも北海道への新洞探查遠征を企画したのは、北海道に新洞があるという噂を聞いたのと、部員の地元であったからであったが、それに加えて探検部として近年は近場への遠征ばかりで、将来の海外遠征への足掛かりとして、前人未到の地での合宿を企画したかったという意図もあった。」と話すのは、岩佐晃輔さん（生命科3回生）、今回の遠征のCLを務めた。「昨年は帝釈峡で洞窟生物の調査をしたので、北海道で新洞を発見して生物を採取して、比較したいという思いもありました。」

探検部では5月の下見調査で、まずは地元への聞き取りと博物館めぐりを行い、洞窟に関する情報を集めた。そこで以下の2つの洞窟に関する貴重な情報が得られた。

① 静内郷土館（新ひだか町）

明治の初めに日高地方を探検した山内作左衛門が見た「染退水源之記（しべちやりすいげんのき）」の中に洞窟に関する記載がある。「染退川」は静内川の旧名であり、水源記はその踏破記録である。これまではその内容を疑う向きもあったが、近年調査隊により水源記に記されている琵琶溪という水源の湖が、調査隊により発見されたため信憑性が見直されている。水源記の洞窟に関する部分を引用すると以下の通り。「パンベツはセタウシの西方48kmにある大きな支流である。東の沢から川に沿って西の沢に出る。水はおおいに合流し東の沢に等しい支流があり、昔銀鉦があったことから銀溪と呼ばれる。この沢の水の流れてくる東の川をシュンベツといい、北から来るのをイトナツプといい、その水の合流点をブツという。—（中略）—シュンベツとイトナツプの合流点に洞窟があるが、まるで牙山にある洞窟のように見える。—（中略）—龍山は深い洞窟の上に200mもの滝がまっすぐに流れ落ちており、白い龍が泳いでいるように見え、流れの音は清らかな響きとなっている。（口語訳は「静内町史」上巻より）。この記述が正しければ、彼の辿ったルートを探査することで、文中の洞窟が発見できるかもしれない。

② 日高山脈館（日高町）

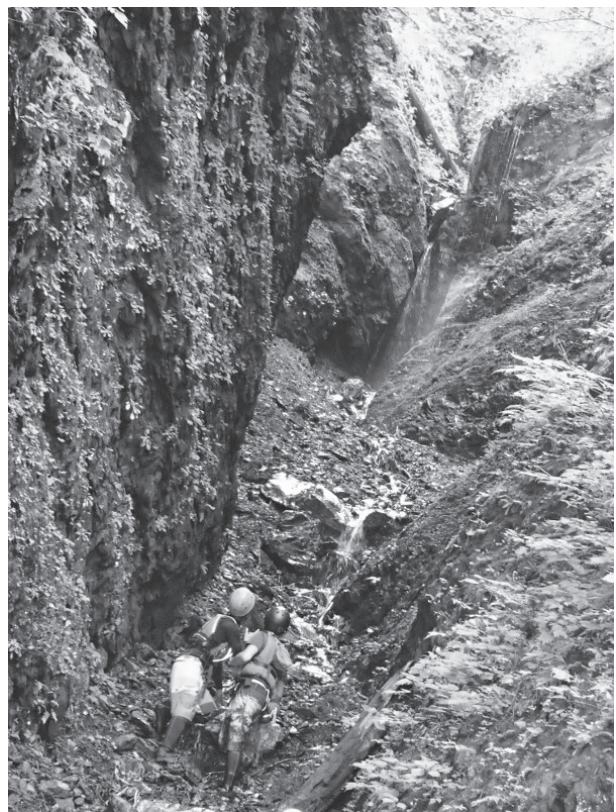
5年前に鍾乳洞が発見され、穴からは水が流出しているという情報が得られた。名前は「しょう乳洞」と

いい、外部からの観察で洞窟と断定されたもので発見時は水流によって洞内に立ち入ることができなかった。場所は日高町沙流川水系上流の千露呂川上流シネツナイ沢だという。今回の調査で、洞内に踏み込める可能性と、付近の石灰岩体にも未発見の洞窟を見つけられる可能性が大いにある。

これらの情報を基に、遠征では2グループに分かれた。新ひだか町で活動するグループ「コタン・コロ」と日高町で活動する「モシリ」である。

「コタン・コロ」グループは静内川に向かい「染退水源之記」のルートを探索した。しかし、土砂災害による道路の通行止めや、藪漕ぎや急坂が連続するルートに予想以上に時間を費やしてしまい、踏査できたのは一部区間だけであった。

結果として、ルート上では洞窟らしきものは発見できなかった。岩佐さんは「静内川沿いでは土砂崩れが多発していますし、ダムも建設されています。そのようなことが原因で洞窟がなくなってしまったのかもしれない。」と話す。静内川水系には1966年に静内ダム、1983年には高見ダムが完成し、静内川流域の広い区間が水没してしまっている。山内作左衛門が見たという洞窟も、水底に沈んでしまったのだろうか？



静内川（染退川）水系遡行中、発見した岩陰にアプローチ